カラスはこわい

五月の連休あけのある日、五つの子スズメが我家にやってきました。四月の末に保護センターで里親講習と研修を終え、アタフタと短期里親になりました。「こんな短気な親について行けるかな」と言いたげな初めての里子たちでした。

衣裳ケースに電気アンカを入れ、まだ幼いスズメを暖めました。カラスが後でひどい仕打ちをするとは夢にも思わず、スヤスヤ眠る３家系の子たちでした。14グラムの小さい子は手で抱き、20グラムもある大きい子は抱かずに、先細に削った割箸から練り餌を食べさせました。練り餌はﾄﾞｯｸﾞﾌｰﾄﾞと ﾏｲﾅｰﾌｰﾄﾞと ﾍﾞﾋﾞｰﾌｰﾄﾞを混ぜたものです。

スズメのお宿は 紅茶の箱に居心地よくティッシュを入れたものでした。２、３日たつとケースから飛び出すようになり、鳥かごに移しました。食欲旺盛で、それぞれ１回にねり餌を数口、ミールワーム（mealworm）を数匹食べました。さらに数日後、小さめの２羽をのぞいて 自分でムキ餌を床から拾い食いするようになりました。

預かって２週間がたちました。「日光浴が必要です。自然の鳥は太陽の下で育ちますよね。陰も作ってあげて。」との助言に従い、私の目の前で太陽を浴びる日課を欠かしませんでした。

前日と同様、ベランダの露天風呂のとなりで日光浴させました。しかし、今回だけ私は鳥かごから離れました。１０分後に戻ると、上のモンタージュ写真のように、カラスが鳥かごの上にいました。すぐに追っ払いましたが、手遅れでした。

２羽の足先がカラスに食いちぎられたのです。うち１羽は不思議にも出血がなく少し不自由に移動していました。もう１羽は脚全体がパンパンに赤く腫れ、出血があり、うずくまっていました。

困った時は先輩方の助言を仰ぐ。「止血せねば、小さい体はすぐ弱ります。」この助言にしたがい、ハンダゴテ手術を実行しました。熱いコテを脚の先端に３秒間あてがい ヤケドさせると、止まりました。鳥かごの中と外に落ちていた足輪を拾いました。ピンクと緑です。

「鳥かごは安全といえない。常に監視の要あり。」

貴重な教訓を得ました。私が鳥かごから離れていなければ... 後悔先に立たず。

２羽のスズメは不幸中の幸いか命は拾いました。他のスズメも大きなショックをうけました。一番大きなリーダーは五体満足でしたが、赤ちゃん返りになりました。事件直前まで自力で食事していました。それがくちばしを開け羽を震わせ餌をねだるようになりました。

露天風呂で飼っているカメが事件の前に甲羅干しをしなくなったので 不吉な予兆はありました。後で水を汲みあげ調べると、カメは行方不明でした。長い飼養の間に、カラスがきたことはありませんでした。うまそうなスズメに目をつけ、先にまずいカメを捕まえたのではないかと思います。

事件の数日後、ビデオを見てもらったところ、自然保護センターでの放野準備ＯＫとのお墨付き。「自宅で余生を」はまぬがれ、センターのケージで飛行訓練続行です。止血した脚は腫れがひきましたが、ぶら下がっているだけになりました。それでも片足で器用に餌を食べ水を飲みます。

事件から３週間後、センターの裏畑で放野しました。別の６羽と合せて１１羽を放し、最後の２羽が飛び立つところを下の写真に示します。今でもセンターに揃って遊びに来るそうです。

1999.6.23　　有田 稔